

当たり前でない家族

村上市立神林中学校 3年 阿部 美波

いつものように学校から帰宅すると、ふだんは元気な弟が一人で泣いていました。母に聞くと、

「おばあちゃんが亡くなったんだよ。」

そう告げられました。

私の家には、祖母と曾祖母がいます。家族で話をするときは、祖母は名前で、曾祖母は「おばあちゃん」と呼びます。亡くなったのは曾祖母です。私はそのとき、曾祖母にもっと何かしてあげればよかったという思いがこみ上げてきました。

私にとって、誰かの死に関わることは初めてでした。亡くなったと聞いた日、私は実感が湧きませんでした。しかし、翌日、曾祖母が霊柩車で運ばれ、家からいなくなったとき、もういないんだという思いにかられました。その夜は、喪失感と何もできなかった悔しさで、涙が止まりませんでした。

何日かたったころ、自分は家族に何ができるかを考えるようになりました。まず、家族が今まで私にしてくれたことを思い出してみました。母は、私がバレーボールのつらい練習にもう行きたくないと言ったとき、特に声をかけてくれるわけでもありませんでしたが、お弁当に私の好きなお菓子を入れてくれていました。祖母は、私が祖母の家に行って夜遅くに帰るとき、もう中学3年生にもなる私のことを心配して、必ず家まで送ってくれました。

今まで、これが私の当たり前の日常で、深く考えることはありませんでした。しかし、全てが当たり前ではなくて、全てが家族の思いやりなのです。本当にありがたいことだなと思います。亡くなった曾祖母も、自分のものはみんなのもの、誰かに何かしてあげたいという気持ちが強かったことを思い出しました。

今、私は思います。家族が私に与えてくれている「思いやり」を、自分が大人になったとき、誰かに返せる人間になること、家族が私に与えてくれたものを無駄にせず、自分の人生に生かし、家族の一員として周りに誇れる人間になることが、私にできることではないかと。

しかし、私はまだその目標を達成できる人間ではありません。曾祖母が亡くなる2週間ほど前、病院にお見舞いに行ったとき、私は曾祖母が多くの管でつながれている姿を見て、曾祖母の顔を近くで見ること、話しかけることもできませんでした。亡くなるとわかっていても、曾祖母がまだそこにいるという事実が、まだ生きているから大丈夫という安心感を、心の隅に持たせていたからだと思います。

これは、私だけでなく、人間みなそうではないでしょうか。失って初めてその大切さに気づき、後から後悔が押し寄せてきます。

私は、今から家族のために急に何か行動するのではなく、これからの人生の中で、家族からもらった思いやりで、家族に誇れる自分になりたいと思います。

私はまだ、私の家族のような思いやりを持っているとは言えません。小さなことでもよいので、他の人のために何かをする、思いやりの気持ちを持っていきたいと思います。

曾祖母の死は、私にとって受け入れがたい経験でした。同時に、家族と命のありがたさを考えさせてくれました。命は有限であり、今の家族がいることが当たり前ではないことを知った今、私は、大切な人のために何ができるかを考えて、家族からもらった思いやりの心を常に持ち続けて生きていきたいと思います。